

●「赤心」継がん

Dream

五代塾

Godaijuku

Sinbun (新聞)

第 25 号

発行：Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

発行責任者：理事長 川口 建

— 五代友厚等の薩摩藩

第一次英国留学生派遣 160 周年とパリ万博 —

元治 2 (1865) 年 3 月 22 日(旧暦)、五代友厚を含む 19 名の若き薩摩藩士
(うち 2 名は他藩出身者) が英国に向けて旅立った。

パリ万博と日本人海外視察

Dream 五代塾会員 上村 修三

(五代友厚顕彰会世話人)

もともと薩摩藩留学生構想は、島津斉彬が 1857 年(安政 4)から密航留学を構想し、1859 年(安政 6)の春に留学生を派遣することが決定していたが、1858 年(安政 5)7 月に斉彬が急死したため、留学生派遣は頓挫。1863 年の薩英戦争を機に、薩摩藩では海外に通じた人材養成の気運が高まり、友厚が 1864 年(元治元年)に、欧州への留学生派遣を強く推す富国強兵策「五代才助上申書」を藩に提出。薩摩藩洋学校「開成所」教授石河確太郎も大久保利通に開成所の優秀な学生の派遣を上申している。

翌年 5 月 28 日にイギリス到着後、一行 19 名のうち、引率係の新納久脩(34 才)、松木弘庵(後の寺島宗則、34 才)、友厚(31 才)と、通訳堀孝之(21 才)、年少の長沢鼎(15 才)を除いた 14 名が、3 か月の語学研修ののち、ロンドン大学のユニバーシティカレッジの法文学部聴講生として入学し、先に入学していた長州藩の留学生 2 名(井上勝(23 才)と南貞助(19 才))とともに学んでいる。なお、日本人留学生を世話したのが、グラバー商会幹旋による化学者 A・ウィリアムソン教授であった。

イギリスでは、寺島はイギリス外務次官と面会し、イギリスの対日政策を有利にすべく外務交渉をしている。友厚等は、武器、軍艦、紡績機械購入、技術者派遣契約を交渉した。なお、新納等は、スコットランドのグラスゴーに

軍艦を注文に訪れている。留学生を除く使節団(団長は新納)はフランス・プロイセン・オランダ・ベルギー各国を歴訪・視察している。ロンドンでは、ベルギー貴族(フランス国籍)シヤルル・ド・モンブラン伯爵から貿易商社設立の話を持ちかけられ、ブリュッセルにおいて薩摩藩とモンブランの商社設立契約を結んだ。さらに、1867 年のパリ万国博覧会参加を協議して、翌慶応 2 年(1866 年)5 月 24 日に鹿児島に帰国した。

このパリ万博では日本からは、江戸幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ別個に出展している。なお、幕府は総勢 25 名の使節団(団長：徳川慶喜の弟で清水徳川家当主徳川昭武(15 才))を派遣した。幕府は日本で統一した出展を画策したが断念し、独自に使節団や勲章まで作った薩摩藩に抗議したが聞き入れられなかった。この幕府使節団に庶務及び会計担当の渋沢栄一(30 才)がいた。渋沢は使節団の経費削減に努め、博覧会出品物の売却等も行った。渋沢は 1 年半ほどのパリ滞在中に、経済の理法、合本株式会社(組織の実際、金融(銀行)の仕組みなどを調査、

万博開催地	開催会期	特記事項
ロンドン	1851.05.01-1851.11.11	国際博覧会の始まり
ニューヨーク	1853.07.14-1854.11.01	米国初の国際博覧会
パリ	1855.05.15-1855.11.15	仏初の国際博覧会 始めて万国博覧会と称す
ロンドン	1862.05.01-1862.11.01	日本の遣欧使節団が視察
パリ	1867.04.01-1867.11.03	日本初出品「幕府」「薩摩」「鍋島」が参加
ウィーン	1873.05.01-1873.10.31	日本政府としての公式参加

研究し、それらの知見が後に日本における近代的企业の設立、租税制度や貨幣制度等の改正・改革へと導いた。渋沢は、使節団随行の際の『航西日記』を二人で著している。この著では、パリ万博の様子や世界各国の参加状況、パリ市中の模様、各国元首の動静などが詳細に記されており、西欧文明の進歩に感嘆したことを吐露している。パリ万博では、幕府は、開成所の高橋由一・宮本三平らの油彩、北斎・国貞・芳幾・芳年らの浮世絵、銀象牙細工の小道具、青銅器・磁器、水晶細工などを出品した。浅草商人清水卯三郎が数寄屋造りの茶屋を営み、3 人の柳橋芸者による独楽遊び、煙管をふかすパフォーマンスが、日本の公式展示以上の人気となった。

1867 年 4 月 3 日、マルセイユに到着した幕府使節団は親善のほか、昭武や青年らの留学が目的であり、留学生は追加を含めて帰国時には 32 名を数えた。使節団はパリ万博視察、フランス皇帝ナポレオン 3 世に謁見。観劇や競馬観戦、病院視察などを行い、昭武等数名は 9 月 4 日より、スイス、オランダ、ベルギー、イタリア、イギリスを訪問して国王らに謁見。昭武や幕府派遣留学生は数年の留学を予定していたが、1868 年 1 月に大政奉還の報に接し、使節団は 10 月 19 日に離仏、12 月 16 日横浜に帰国した。

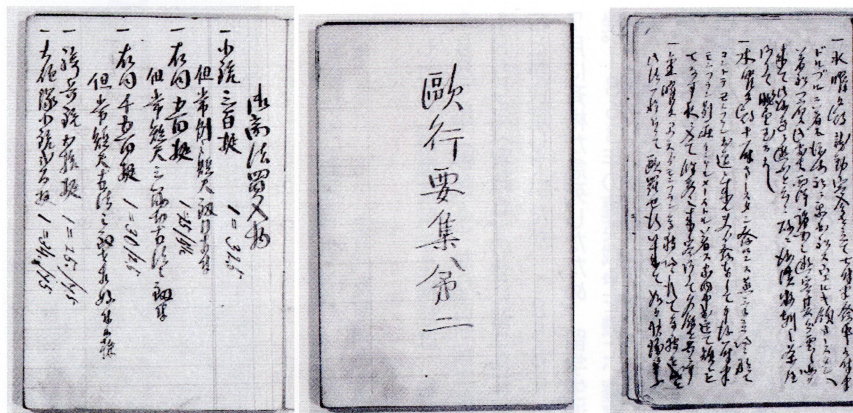
話は戻るが、イギリスに残留した薩摩藩第一次英国留学生たちは、学業のほか、欧州各地を訪問するなどしたのち、一部はモンブラン伯爵の紹介でフランスに転学、森有礼(19 才)、鮫島尚信(22 才)、長澤鼎、吉田清成(22 才)、畠山義成(24 才)、松村淳蔵(25 才)の 6 名は、英国下院議員ローレンス・オリファントの「日本再生のために役立つ」という勧めに従い、オリファントが信奉する宗教家トマス・レイク・ハリスが創立した宗教共同体「新生兄弟社」(以下、ハリス教団)のコロニーに参加するため、1867 年夏にアメリカに渡った。教団コ

ロニーでの自給自足の共同生活は、学資の尽きてきた留学生たちにとっても好都合であった。留学生たちは、ハリスの説く神秘的な体験や教義に深い感銘を受けたと伝えられ、イギリス政治家ジョン・ブライトの日記に「留学生たちがハリスを救世主のように仰ぎ、ハリスの呼吸法によって神の存在を感じた」と記されている。なお、厳しい共同生活やハリスの教義への疑念から、多くの留学生は1年以内に共同体を離脱するが、森有礼や長沢鼎など一部の留学生はハリスとの関わりを続け、その後の生涯に大きな影響を受けた。

ハリス教団には、森らの勧めで、薩摩藩から新たな留学生江夏蘇助、仁礼景範、湯地定基、谷元兵衛門、野村一介)たちも参加した(慶応2年3月28日に出国した薩摩藩第二次米留學生)。薩摩藩が資金難に陥った頃に派遣された薩摩藩第二次米留學生であったことから、第一次薩摩藩英国留學生と比較し、人数も3分の1になり、日本人通訳も同伴せず、学費の工面に苦労している。湯地は困窮極まり学費工面のために一時帰国し、種子島で米国人から借金をして学費を調達した。

薩摩藩第一次英国留學生からは、醸造業界で活躍した長澤鼎、村橋久成(24才)を輩出した。長澤は唯一人ハリス教団に残って厳しい労働と信仰生活を送り、教団の経営のためにワイン醸造をニューヨークのブルックリンでジョン・ハイド博士から学び、ワイン原料となる葡萄栽培を中心とする農業で教団財政を支えた。1882年には60万ガロン(約227万リットル)を貯蔵できるワイン醸造所が完成し、1893年には当時のカリフォルニアワイン生産量の1割を占める大手に成長した。1900年、長澤はワイナリーを教団から買い取り、カリフォルニア大学で醸造技術を学ぶなど研究を続け、高級ワインに育て上げてカリフォルニアワイン王といわれるようになった。

村橋は他の留學生より早く帰国し、戊辰戦争に従軍し、明治4年(1871)より開拓使出仕。函館近郊の七重開墾場の開設、札幌の琴似に養蚕を軸とする屯田兵村建設に従事。ドイツで醸造技術を学んだ中川清兵衛を雇い入れ、麦酒醸造所を造るプロジェクトのリーダーとなり札幌に開拓使札幌麦酒醸造所(現在のサッポロビール)を開設した。ほかに葡萄醸造所、製糸所、種畜牧場、鮭小化場、鶏卵小化場、製物試験所の創設に手腕を発揮した。明治14年(1881)、官営物払い下げ事件直前、突然開拓使を辞し、雲水の旅に出て消息不明となった。11年後、10月12日付神戸又新日報に「鹿児島鹿兒島郡塩屋村 村橋久成」と死亡記事が掲載された。 ※年齢は数え年表示



右1枚「開国日記 慶応1年」五代の海外での滞在記録(1ページ目)
左2枚「欧行要集第二 慶応1年」五代が帰国するまでの間の購入記録(1, 2ページ目)

五代友厚も立ち寄った 外曾祖父永見米吉郎の家(上)

Dream 五代塾顧問 曾野豪夫

五代の長崎軍団

明治6年、五代友厚(三十九歳)が大坂と東京で弘成館(鉱山業)を設立に至った経緯と主な協力者(部下)の名前を、五代歿後一〇年目の明治二十八年に弘成館員だった片岡春卿が『五代友厚君傳』に書き残している。

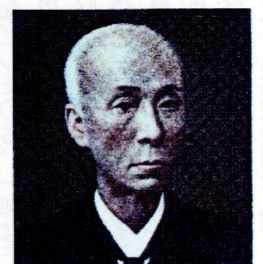
「君(五代が)つらつら思うらく(思うに)、国家富強の基を立てんと企図するには、先ずその財源を求めざるべからず。それ鉱物は天与の恩恵なり。全人未発の財源を地下に求むるにしかず、と。ここにおいて各地に鉱坑を開き、この天与の恩恵を採取する目的を以って、波江野休衛(薩人、豪直にして胆力あり)・堀孝之(長崎人、謙譲にして慎重なり)・岩瀬公圓(長崎人、寛容にして質実人)・永見米吉郎(長崎人、温厚にして和易なり)・久世義之助(美濃人、鄭重にして緻密なり)等の諸氏と議し、数十万円の資金を投じ、大いに属僚(信頼する部下)を集め(一時館中幹部と称するもの二〇〇余名)、以て本館を設立す。…西郷隆盛、かつて本館の扁額に題して「誠心貫徹石」と。



日本銀行大阪支店。明治36年(1903)完成。
左(南)土佐堀川、右が堂島川。
五代友厚はこの敷地に明治17年に最後の自邸を完成した。翌年9月東京で病没した。
(兼松房治郎も明治21年迄この地に自邸と倉を保有していた。)(Wikipedia)

君吾が意を得たりとし、此の語を印章に刻し、館中子弟の俸給指令に捺す。」(読みやすいように少し書き直した。)

この文章



晩年の永見傳三郎(明治10年国立第十八銀行初代頭取)『十八銀行130年史』

に長崎人の名前が三人上がっている。堀は元オランダ語通詞で、慶応元年薩摩藩英国留學生十四名の引率団五名の内の通訳として渡欧した。岩瀬も元長崎オランダ語通詞である。永見米吉郎は長崎出身で慶応二年以来大阪の永見商店主で、筆者の母方の曾祖父に当たる。米吉郎は江戸時代から代々長崎で豪商といわれ、薩摩藩御用達でもあった永見商店々主傳三郎の末弟だった。永見商店は大名貸しも行っていた。

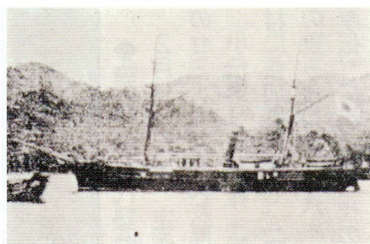
五代が選ばれて薩摩藩から長崎海軍伝習所の生徒になつて長崎に遊学したのは安政四年(一八五七)で、この時五代は二十三歳、米吉郎は二〇歳。明治維新の十一年前のことである。五代は来崎(らいさき)して間もなく永見商店を訪問したことだろう。五代はこれら三人とは特に明治期大阪でその生涯にわたって深い交流を続けることになった。所謂五代の手足となつて大阪で活躍した「五代軍団」の主要メンバーとなる人達だった。



大阪の永見米吉郎(44)と長男省一(7)
明治16年長崎訪問時に上野彦馬写真館にて。
2年後五代逝去、その翌年米吉郎逝去。
(従弟永見英厚蔵)

トーマス・グラバー

傳三郎はトーマス・グラバーが来日した翌年に独立するに際して、亡くなっていた長兄徳太郎の大浦の貸屋をグラバー商会の店舗兼



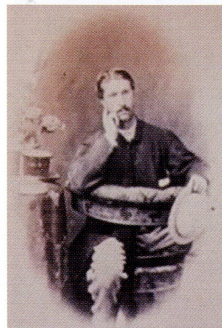
長崎港?の「千歳丸」(Wikipedia)

名目で何とか日本一行五十一人の一人として乗船することができたのだった。(お役所仕事。しかし抜け道はあった。ははは：)

この時の上海

住宅として貸すなどして個人的にも事業面でも大変親しい交流があり、五代にグラバーを紹介している。その後の傳三郎と五代の交流はやがて兩名が刎頸の友と言われる仲となった。そしてその二人の様子を外曾祖父の米吉郎は目の当たりにして長崎で成長して行つたのだった。

維新後
明治二年
に五代が大阪で金銀分析所を設立し、造幣寮に香港からイギリス製中古の貨幣鑄造機を輸入した。私はその時の機械輸入の業務はグラバーと永見兄弟が手掛けたものと思つてゐる。



20 代のトーマス・グラバー

五代、「御船奉行格副役」に

文久二年(一八六二)一月(維新の六年前)、五代は長崎に於いて薩摩藩の「御船奉行格副役」となり、グラバーとともに上海に渡り汽船を購入した。更に四月末に長崎奉行所の通詞岩瀬の情報により幕船千歳丸(せんざい丸、二五六トン又は三五八トン)に乗船して香港に渡ることが出来た。この時、藩主の裁可を得るのに日数がかかり、許可を得た時は既に幕府による各藩の乗船希望者受付は終了済だった。そこで五代は岩瀬の計らいにより水夫の

滞留は二ヶ月間に及び、「乗船した日本人一行は、アロー戦争に敗れて列強に半植民地化された中国の実態、太平天国の乱による混乱、上海租界の繁栄と民衆の生活の貧しさなどを目にし、海防への強い危機感や中国への輕蔑感などを抱き、以後の日本の近代化路線に影響を受けることになった。(横山宏章)」。欧米列強の傲慢な人種偏見に満ちた植民地政策を目的の当たりにし、また体験することができた。

「今のままでは日本は欧米にやられる!」と、幕臣も各藩の若者も覚醒した。そして日本開国を促す契機となった。翌文久三年、鹿児島で薩英戦争。英艦の捕虜となった五代は一年間の逃避生活を余儀なくされた。その間五代は、富国強兵論の上申書を藩主に提出した。

薩摩藩英国留学生一行を引率

慶応元年、五代は自身が藩主に提案していた薩摩藩の若手藩士十四名の英国留学生を引率する五名の副使として、欧州に十一ヶ月間出張して大いに見聞を広めた。

二年二月帰国後、五代は「御納戸奉行格、勝手方御用人席外国掛」を命ぜられ、また長崎在勤となり、勤皇方への武器、糧食、衣服などの供給に奔走した。永見商店も薩摩藩御用達として米穀などの物資調達と運輸に五代の指揮のもと日夜苦勞を共にした。若い米吉郎は、藩の汽船「開運丸」に乗って長崎・鹿児島・大坂間の往復に従事した時、親戚筋の多い狭い長崎にいるよりも新天地に雄飛せんとその船に便乗して大坂に飛び出した。時に二十六歳、独身。勿論兄傳三郎や五代の後押しもあつたことだった。

大政奉還と明治維新

慶応三年四月パリ万博が開催され、幕府の他薩摩藩と佐賀藩がそれぞれ産品を出展した。

一〇月大政奉還。十二月二十八日、五代は仏

モンブラン伯爵と共に兵庫に到着。

翌四年一月、五代は明治新政府の徴士参与、外国事務掛に任じられ、神戸事件、堺事件、更に京で朝廷に向かう英パークス公使襲撃事件の解決に奔走した。九月八日、明治と改元されたこの年、明治元年となった。

五代は大坂で明治新政府の高官となった。四年前に薩摩藩士として英国に旅した時、フランスでモンブラン伯と京阪間の蒸気車と電信設備の建設を契約していた。そのモンブラン伯がいま日本に来ていて大阪駐在の副領事レックを通じて阪神間の電信施設建設を願ひ出た。また翌年二月アメリカ領事ロビネットは京阪神間の鉄道敷設願ひを五代に提出した。明治新政府の外交に直接関わることになった五代は、この外国による二事業の申請を国家のために断わつた。私は若い人に五代友厚の活躍を紹介する入門書として多田慎哉『五代友厚 商都大阪を築きあげた「英雄」の生涯』(三才ブックス二〇一六年)を挙げているが、残念ながら本件については触れられていない。

明治二年、下野と金銀分析所設立

下野した五代は、在官時代に手掛けていた大阪造幣寮に対して地金を金と銀それぞれに分けての納入する事業を手掛けるため大阪金銀分析所という企業を設立した。これには長崎から堀が五代の秘書兼執事、岩瀬と永見が会計として参画した。十二月、五代は鹿児島に帰郷し、妻と離婚した。

三年兵庫県知事伊藤博文の下で神戸で外交を担当していた旧知の萱野恒次の子女豊子(戸籍上はとよ)と結婚した。山中園子編著『五代友厚秘史』(一九七〇)に永松浅造がタ刊「新聞西新聞」に連載した「五代友厚秘話」が急遽『秘史』に組み込まれたが、その意気込みに反して講談調の色物の大衆読み物で私はお勧めしない。(豊子は元芸者ではない。)

大阪の永見商店

四年前慶応二年に長崎から大坂に進出していた米吉郎は、最初は中船場当たりで新たに永見商店を開業した。

明治二年「版籍奉還」がなされたことにより、全国の藩が所有していた土地(版)と人民(籍)が朝廷に返還された。早耳の五代の情報を得たことと思われるが、米吉郎(外曾祖父)は、淀屋橋南詰を西に一〇〇メートル程行つたところにあつた旧吉田藩の大坂蔵屋敷を買ひ取つて自宅兼事務所とした。大川町御霊筋(ごりよう筋)西南角から淀屋小路(こうじ)迄を所有した。現在の住友ビル本館の東北角の部分である。明治四十四年「大阪市土地地籍図」によると五三〇坪である。別に土佐堀川に面した部分九十坪がありここには船着き場や旅館が建つていたが、後年護岸用に市に買収された。

米吉郎は長崎の本家と連携を取りながら朝鮮支那貿易を行い、米、大豆、松脂、牛皮、海産物、銅などを扱い、明治に入つてからは銅商と言われていた。

他方で米吉郎は五代の腹心として明治十一年には大阪株式取引所の初代肝煎専務理事



旧吉田藩邸(土地五三〇坪)のあった場所は現在の住友ビル本館の東北角の部分。

か)として大阪金銀分析所の基礎的な事業に参画した。これは幕末時代から長崎の本家が金融、不動産業や大名貸などを行つて成長してきていたの基本的な金融知識があつたからである。

Dream 五代塾活動状況

◆第20回五代塾セミナー実施

2月15日(土) 定例(偶数月第3土曜日)

のセミナー(五代友厚勉強会)を開催した。

小伝第9話 戯作「惣難獣」と官職辞任を教材に参加者11名で、「惣難獣」原文の現代訳文の読み合わせと、八木孝昌先生の『新・五代友厚伝』に沿って五代の心情にふれてみた。

五代は「惣難獣」と題する時局批判をした戯作を残している。上記のなんとも奇怪な絵と手書きの文書である。五代に関わる伝記は数多くあるがどれも踏み込んだ説明がなく、また書いた時期や批判の対象などに根拠もなく、誤りも見受けられる。『新・五代友厚伝』は具体的な資料検証をもって修正・加筆した伝記である。



惣難獣とは「すべて厄介な獣(けだもの)」であり、「惣難法」との掛詞になっている。すべての者が難渋する厄介な獣を意味する。ここで、この戯作「惣難獣」の出発時期・出所・分布・姿かたち・振る舞いについて、くどいほどの描写を行い、それがもたらす災いを告発

しているが、文章全体に、特定の対象への強い批判が感じられる。その批判が何に対するものかを読み解くことができれば、時代が明治に突入した時点の五代友厚の「心境」を知ることができる。

最初に「惣難獣」の対象は「官吏」とする記述が他の伝記にあるが誤解であり、慶応4年(明治元年)1月から始まった戊辰戦争における官軍の兵士以外にないかと分析している。

「諸国の山奥等より」や「鳴声は生国の訃りがあつて、一様ではない。くやくやと聞こえて、言葉ははなはだ分りにくい」とあり、主に農兵を指し、「惣難獣」は農兵を含む混成軍団としての官軍を指している。当時は大きな兵力が必要になったとき、各藩は正規兵を補うべく、農兵を徴用していた。例えば、鳥取藩の派兵800名の内200名が農兵が含まれ、丹波国の山国隊も農兵でした。また主力の長州軍は正規軍(藩士)、騎兵隊など士庶混成隊、農兵の三層構造をとっていた。なお薩摩藩は領内人口4分の1の武士、半農半士の郷士(外城士)の外城制をとっていた。

次に、五代は理不尽な会津攻め「会津征討」に対して批判的な考えを抱いていた。これは必ずしも例外的ではなく、松平春嶽や伊達宗城も批判的であった。4月11日に江戸城開城し徳川幕府は解体、徳川家は駿府に移封、慶喜は水戸で謹慎で決着した。官軍は倒幕の目的は達成したので、会津を攻めます。これは、幕末に京都守護職に役にあつた松平容保と会津藩は、特に長州から仇敵とみられていた。私怨に

戯作「惣難獣」の大意

五代友厚に「惣難獣」という戯作があります。大意は、「明治元年の中春の頃、諸国の山奥等より、異形の獣が生じて、ここかしこに集屯して、万民を悩ますこと甚だしく、退散することを、神に祈るばかりである。この獣は都会や西国に多いが、駿河と遠江の辺は、この愁いはない。獣は図の如く、頭に権を裁き、頭でかちにして、頬の皮が厚い。鼻たかくて天狗にひとしく、口広くして舌長く、ある時は二枚にもなり、悪毒を吐き、人害をなす。手足は勿論、肩より爪をはやして、ことに長い。金銭をつかむこと、驚熊鷹の如し。背に翼を生して、今ここにあるかと見れば、翌日は東京・長崎に住する。鳴声は生国の訃りがあつて、一様ではない。くやくやと聞こえて、言葉ははなはだ分りにくい。別品の女性を見る時はごぼうの如く尾を振り、莫太の黄金を吐出して戯れること尋常ではない。見苦しい有様で、頭の剣を以て、人の頭を押さえ、悩すことも少なくない。この上ない、古今未曾有の異形のけだものにて、この獣が生まれてのち、世界に愁いごとが絶えない。実に惣難獣である。誰か早く、退治されることをつつしんで祈る。」

(開学の祖 五代友厚小伝より抜粋)



近いものだと考えた奥羽越列藩は「会津藩は恭順の意を示しているの、寛典の措置をお願いしたい」と嘆願書をだすが、奥羽鎮撫使(ちんぶし)はそれを却下した。

「駿遠の辺は、此愁曾そのうれひかつて無し」と書かれている。「駿遠」とは「駿河」を意味する「遠江」とおとつみ」を合成した語で駿河地方を意味する。この地は「愁い無し」というと、官軍の攻撃対象ではなかった。徳川慶喜は罪一等を許され、慶喜は水戸への謹慎、宗家は駿府に80万石で移封し静岡藩に決定された。徳川慶喜を許したのであれば、政府は恭順を示す松平容保も許すべき。また、長州が蛤御門の変(禁門の変)を引き起こし「朝敵」となるが、「寛典」をもって許されていることから、会津は許されるべきは当然の論理となる。これが却下されれば奥羽列藩は戦うしかない。結果、8月23日、会津白虎隊が飯盛山で自決、9月22日に会津は落城した。

「惣難獣」を書いた時期は、明治元年10月から年末にかけてであると推察している。何故ならば「五代友厚伝記資料」第4巻には「友厚挂官後の戯作という(官を辞した後)の注を付しているが、リアルタイムの迫力の説明ができない。五代は「誰か早く退治なさることを謹んで祈る」と書いているから、戊辰戦争中のことと推察できる。9月22日に会津が落城し、官軍の半分は引揚げ、奥羽の残党が榎本艦隊と合流して10月に蝦夷地に到着。戊辰戦争は仕切り直し状態となり、東北戦争に動員された官軍は一旦引き揚げる。(再度政府軍が北海道へ軍隊を派遣するのは翌春)、そうすると、10月になれば各地に政府軍帰還兵が戻ってくるわけで、大阪を経由する東北戦争従軍

者も数多くいて、五代は多くの具体的情報入手でき、また戦況は東京の友人(寺島宗則、森有礼等)から逐一情報を得ている。

最後に、五代が「惣難獣」を書いた動機が辞官の契機につながったといえる。五代は堺事件で攘夷の野蛮な暴発を現認し、また、避けられたはずの北越東北戦争では官軍の蛮行と人々の災厄を知った。加えて鹿児島では新政府の参与である自分への不評が渦巻いているのを郷里の友人から知らされている。他方で「富国」のための課題は棚上げのままである。五代は官の世界に見切りをつけることも、これが「富国」の課題へと踏み出そうとした、これが五代の官職を辞した理由である。(川口建)

◆第21回Dream五代塾セミナー予定

日時: 4月11日(金) 8時~18時 頃予定

場所: 奈良県天川村天和銅山付近(てんかわ天和の里)を探索(約1万円)

主催: Dream五代塾

共催: 五代友厚顕彰委員会

☆企画段階で定員に達しました。

編集後記

当紙第23号で掲載した「半田銀山シンポジウム」(昨年11月10日開催)で、アニメ「機動戦士ガンダム」のキャラクターデザインを担当したマンガ家「安彦良和氏」が講演され、五代友厚と半田銀山再興、そして地域社会の貢献を、機会があれば漫画として描いてみたいと発言されました。それが早々に実現しました。「銀色の路-半田銀山異聞-」(短期集中各州連載)として、第1話 山を継ぐ者(3/6)、第2話 嵐の予感(3/19)で始まりました。「週刊ヤングジャンプ」は全国で販売され多くの若者が愛読している漫画雑誌です。五代の志や功績を若者に知ってもらえれば嬉しいですね。(川口建記)

(連絡先:川口建)

Email: gogoken12345@gmail.com

Tel: 080-4497-5688

HP: <https://www.dream-godai.com>

